

諏訪洞・備中川のせせらぎと水車

岡山県北房町



穏やかに流れる備中川。5月中旬、濃い緑のなか、川辺には鮮やかな色の花が咲き、農村の風景に彩りを添えていた。



備中川に架かる橋(上)。向こう岸では、水車がギンギンと音をたてながらゆっくりと回っていた。農村ならではの、のどかで懐かしい音風景である。



古くは吉備文化と出雲文化を結ぶ交通の要衝だった、岡山県北西部にある北房町。町の中部から東部をカルスト台地が占め、その間をぬうように旭川の支流・備中川(皆部川)が蛇行している。水が清らかなためか、「ホタルの里」としても知られ、初夏には川辺で無数のゲンジボタルが乱舞する。また、一帯はカルスト地形に富み、文献に登場するものでは日本最古の「備中鍾乳穴」をはじめ、「岩屋の穴」など、鍾乳洞が点在している。県の天然記念物に指定されている「諏訪洞(諏訪の穴)」は、その多くの鍾乳洞のひとつである。

町役場から、備中川の静かな流れに沿って上流に向かう。周囲には農村が広がっている。鮮やかな花の色が、緑の風景に彩りを添えている。10分ほど歩くと、川の向こう側に、ギンギンと音をたてて回る水車が見える。水車を動かしている、山中から備中川に注ぐせせらぎもかすかに聞こえる。

川に架かる橋を渡り、水車の脇の小川をたどっていくと、小さな滝が飛沫をあげて落ちている。さらに奥の石段を登る。湿気のためか、足元一面にコ



水車の脇のせせらぎ(左)と、その奥にある滝(右)。澄んだ水の流れる音が心地よい。地元の中学生在が、学校のホームページに掲載するため、諏訪洞周辺取材していた。



まるで異界へ誘っているような諏訪洞の入口。洞の入口は幅3m、高さ4.5m。総延長は1,750mに及ぶというが、現在は十数m先までしか立ち入ることができない。



洞内から外を見た風景(上)と、入口からすぐ下の水の流れ(右)。水の量は、橋が浸かるほど圧倒的で、その流れの響きは洞内を満たす。雨が降ったときは、水の勢いはさらに激しくなるという。



照明に照らされた洞内。意外に高い天井を見上げると、水の浸食でできた、奇妙な形の岩を見ることができる。

ケがむしている。やがて崖下に、二人並んでは通れないほどの細く赤い鉄橋が現れた。橋のすぐ下では、大量の水が激しく流れている。その先で、岩がぼっかりと口をあけている。諏訪洞の入口である。

諏訪洞は横穴の鍾乳洞で、全長約900mとされていた。しかし、近年の測量の結果、総延長は1,750mに及ぶともいわれている。以前は一般に公開されていたが、水量が多く、常に水であふれて危険であり、住民の飲料水源でもあったことなどから、現在は入口から十数m先までしか足を踏み入れることができない。

橋の途中で、洞内から漂ってくる冷気を感じる。終端はもう洞内だ。地面はすでに水に浸かっている。壁面の至る所から水が湧き出で、したたり落ち、

天井からは、その浸食によってできた特異な形の鍾乳石が垂れ下がっている。水音はさらに激しくなり、洞内で響きわたる。長い年月をかけてつくられた、美しくも奇妙な自然の造形と、そこに反響する水流の音が、独特の音風景をつくっている。

諏訪洞周辺では、その奇勝^{きしやう}に呼応するように神秘的な光景が繰り広げられる。諏訪洞からの湧水がゲンジボタルの幼虫を育て、6月上旬から下旬にかけて、成虫したホタルが川面いっぱいに乱舞する風景である。無数のホタルの放つ光の群れは数kmに及び、まるで光る帯のように見えるという。6月末には、陸生のヒメボタルも同時に飛び交うという珍しい光景も目の当たりにできる。

「ホタルの里」の音風景。それを



備中川を挟んで諏訪洞の反対側にある、水と緑があふれる「ほたる公園」。6月、ここで「ホタルの里開き」や「ホタルまつり」などが開催される。

形成するのは、太古より諏訪洞から湧き続ける水だ。備中川に注がれるその清流は、動植物の恵みとなり、そして人の生活の営みも潤わせている。だからこそ、残していきたい音風景である。

よく聞こえる時期・場所
1年をとおして。とくに春から夏にかけてがよく聞こえる

問い合わせ先
北房町産業振興課 電話(0866)52 5213

参考文献：環境省大気保全局大気生活環境室発行『残したい日本の音風景100選』パンフレット